



5 志野茶碗



6 唐津向付

ないわけです。古窯址からも荒川豊藏先生が昭和4年に美濃の大倉の古窯を発掘されて以来、様々なすぐれた陶片が出ておりますけれども、完形品というのはごく少量あります。やはり消費地ならばこそそういう完形のものが出て来るわけでありましょうけれども。しかし志野としましてはもう一つすぐれたものではありません。後ほどお見せする「卯花墻」(国宝)とかそういうものはやはり非常にすぐれておりまして。当時焼かれました志野の半筒様式の茶碗としては一般的なものだったのだろうと思います。

#### 6. 唐津向付 h.6.3cm d.13.9cm, h.6.3cm d.13.8cm

これも弁慶石町から出土した唐津の向付です。これは弁慶石町出土の陶器の中で最も興味深い重要な資料と言えるかもしれません。なぜならばこれがもし慶長元年に埋もれた資料としますならば、慶長元年頃にこのような志野の向付の影響を受けた唐津の向付が焼かれていた。少なくとも慶長元年には既にあったことが判然とするからであります。従来の発想ですとこういったものは慶長年間後期ぐらいではないか、志野と繩部の影響を受けて絵唐津のさまざまな向付が焼かれるのはもうちょっと時代が下がると思っていたのでありますけれども。一連の美濃と信楽、備前の製品はずっと時代がおさえられるんですね。ですからやはりこれも慶長元年以前の生産品であるというふうに言わざるをえないわけであります。唐津焼の研究にとってこんな小さな器ですけれども非常に重要な示唆を与えるものでございます。

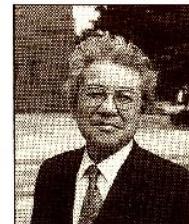
(紙面の都合によりスライド解説は弁慶石町出土品に限らせて頂きました。)

(文責 友の会事務局)

#### プロフィール

#### 林屋 晴三氏

1928年宇治市生まれ。東京国立博物館次長。茶陶研究を中心とするわが国における代表的な陶磁史学者。東洋陶磁学会・常任副委員長。主な著書は「日本の陶器」「高麗茶碗」(中央公論社)、「原色日本の美術-陶芸」(小学館)、「土陶磁のみがた」(第一法規出版)など多数。第3回小山富士賞受賞。



## 企画展の御案内

三宅一生との出会い  
*Lucie Rie*  
 現代イギリス陶芸家 ルゥーシー・リー展

会期：平成元年6月27日(火)～7月30日(日)  
 主催：当館企画展示室及び第4.5.6展示室

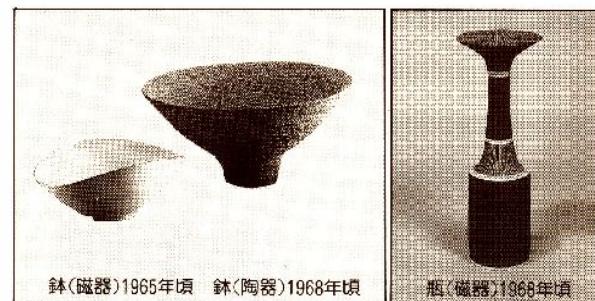
#### ■「現代イギリス陶芸家 ルゥーシー・リー展」

ルゥーシー・リーは現代イギリスの代表的な陶芸家で、87歳の今なお旺盛な制作活動を続けています。

1902年、ウィーンの富裕なユダヤ人の家に生まれました。ウィーン美術工芸学校で陶芸を始め、ヨーゼフ・ホフマンによる美術運動「ウィーン工房」のデザインシンクヤブトである建築と工芸の調和という理念に影響を受けています。1938年ナチス・ドイツによるオーストリア併合でユダヤ人迫害が激しくなると、彼女は自分の作品を携えて、ロンドンに亡命しました。そしてバーナード・リーチ、浜田庄司、ハンス・コバーらとの交流のなかで、独自の作風を展開していました。余分な装飾を一切排除して簡潔なフォルムを追及し、宋磁を想起させるような端正な造形をおこなっています。また、しなやかな器体にあたたか味のある釉を使い、掛け落とし、線象嵌などによるシンプルな幾何学文様を試みるなど、ユニークで品気ある作品が多く見られます。

ノックション・デザイナーの三宅一生はルゥーシー・リーの作品に西洋と東洋の精神を超克する造形の精華を見いだし、深い共感を覚えたのでしょうか。

今回は、1930年代のウィーン時代から現代までの壺、鉢、瓶、碗など約90点の作品を展示する大規模なもので、わが国では初めて、また歐米でもまれな展覧です。今回の展示で注目を浴びると思われるのは、ルゥーシー・リーが制作したボタンを使用した三宅一生の衣製作品も紹介することです。(D)



鉢(磁器)1965年頃 鉢(陶器)1968年頃

瓶(磁器)1968年頃

#### お知らせ

今年度より「友の会通信」とは別に「友の会だより」を発行することになりました。講演会のお知らせは「友の会だより」の方に載せますので、お見落としのないように御注意下さい。

1989年7月5日発行(年4回) Vol.5-1(通巻16号)

## 大阪市立東洋陶磁美術館

# 友の会通信

ASSOCIATES NEWS No.16

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局  
 発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL. 06(223)0055

#### 美術館の舞台裏 (13)

5月から6月にかけて、当館では「桃山の茶陶展」を開催しました。この展覧会を例にとって、展示についての問題をいくつか考えたいと思います。

当館として茶陶の展覧会を開催するのは、開館以来初めてのことです。展示の方法一つ取りあげてもいろいろな問題にいたりました。まず茶陶の展示には、箱書や仕服、書付けなどを同時に並べるのが一般的です。しかし当館では、茶陶というものをあくまで物自体の持っている造形的魅力だけでお見せしようという立場を取ることとしました。いわば「裸」の状態で茶陶をごらん頂こうということです。そのため付属物の展示を取りやめたほか、敷板も茶陶によく用いられる杉板や鈴板のような特殊なものではなく、当館で平常使用している布ばかりの敷板を用いました。これはまた、当館の展示室全体の雰囲気をできるだけ統一したものにしようという方針からの対応でもあったわけです。ただ、茶碗については、茶の湯の伝統の中で最も格式のある道具であることを、展示に少し変化を加える意味で、紫の袱紗を敷いた箇所もあります。今回の展覧会では基本的に茶陶を茶席らしくなく展示することになりましたが、いろいろの御批判はありますようですが、茶陶を純粋にやきものそれ自体で見る一つの立場は貴かれたように思います。

もう一つ、当館の展示設備は鑑賞陶器の展示を主体に作られていますので、茶陶の中でも茶碗の展示には問題があることを改めて痛感いたしました。すなわち、展示台の高さが床面から1,100ミリと固定されていますので、茶碗の見込みを見ようとしても容易ではありません。茶碗を少し手前に傾けて展示すれば見込みは見えますが、大事な品を拌借している立場からは、そのような取り扱いは許されることではありません。また展示ケースの前に低い踏み台を置くことも検討しましたが、混雑してくるとひっかけて倒れる人が出ることも予想されますが、中止いたしました。その代り、不自然なほど前寄りの位置に茶碗を置くなどの工夫をした箇所もあります。しかし腰をかがめることなく、楽で自然な姿勢で物の形や質を十分に観察できる点では、当館の展示ケースはそれなりに有用ですので、今後ともさまざまな工夫を重ねてより見易い展示を心がけていきたいと存じます。

大阪市立東洋陶磁美術館  
 館長 伊藤郁太郎

◆第13回講演会要旨◆

## 「桃山の茶陶」

日 時：平成元年6月3日(土)  
午後1時半～3時半  
会 場：大阪弁護士会館・6階大会議室  
講 師：東京国立博物館次長 林屋 晴三氏

昭和30年代までは、桃山の茶陶の研究というと明らかに伝世品だけを対象にして、印象批評的なものが研究者といわれる人達の間でも一般的でございました。しかし昭和30年代にはいり、また、40年代頃からは特に桃山の茶陶の主要な生産地である美濃とか瀬戸等の古窯址の考古学的な発掘調査によって編年的考察という新しいアプローチが加わりました。それまでの漠然と利休さんの時代とか、織部の時代とか、遠州の時代とか、それでは學問としては説得力がなかったわけですが、考古学的な発掘が加わることによって大分はっきりしてまいりました。このような考古学的な調査研究、さらに文献学的なもの、そしてまた伝世の作品に対する美的価値判断とかいろんなものが総合されまして、昭和50年代以後の日本のやきものの研究は非常に深まり高まったと思われます。しかし古窯址の中からちょっとした箇目のついた破片が出てきても、考古学者にとっては単なる破片かも知れませんが、伝世の茶陶というものをふまえて、そこに表れた美意識や想いというものは何だろうという問い合わせをする人間にとりましては、その箇目に意味深いものを感じるわけであります。ですから東洋陶磁学会の方々とも考古学的なものと美術史的なものを兼ね備えた新しい歴史学が出てこないとやきものの研究というものは本物にならないかないんじゃないかということを過日も話し合ったところであります。それに加えて最近は古窯址、すなわち生産地から出ました資料の上に今回の展覧会によって明らかにされておりますように京都市とか堺市とか大坂城の跡とか、消費地から出土しました陶片等の様々な遺物によって生産地と消費地との絡みの中でより深くものがとらえられるようになってきました。これは誠に重要なことでありますので消費地というものをふまえた桃山の茶陶の研究というものは、おそらくここ10年もまだ経ていないと思います。特にこの度京都市、あるいは伏見などから非常に興味ある陶片がたくさん出てまいりましてなるほどというような事がございます。これまで方々の古窯址発掘の資料というものを見てまいりましたけれども、確かにその窯でどういうものが焼かれたか、また、下層から上層にかけてある程度の編年的考察という意味では興味があるんですが、消費地から出てきたものは総合体として美濃のものあり、唐津のものあり、備前、信楽などがあって、何か

時代というものを背景にして生きた人間がものを作り使ったというふうな事を非常に強い印象をもってつかまえることができる。

そういう意味では生産地である古窯址から発掘された遺品とは違って、特に私のように伝世品というものの、美術史的な考察という中でずっと生きてきた者にとりましては消費地の出土品により深い興味を抱かされたというのが率直な印象でございます。

ただ茶人達が、また数寄者達がずっと桃山以来伝えてきましたものは、確かに生産地から出土したものよりも、また消費地から出土したものよりもすぐれたものが多くあります。やはり人に深い感動を与えなければ人は伝えないのであります。何と申しましても伝世品の中に、桃山の茶陶のすばらしいものが多いような気が致します。従って、今日のお話は最初に今、東洋陶磁美術館に並んでありますものを京都の地域別、発掘場所別にスライドでさっとお見せしましてその概略を申し述べ、その後で伝世品についてスライドでお見せしつづ桃山の茶陶への理解を深めていただくことに少しでもお役に立ちたいと思うわけでございます。

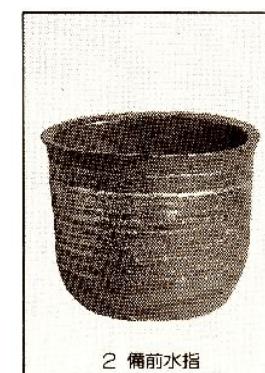
今回の出土陶片の中で最も重要なと思われるのは三条御幸町（ここは京都一の洋服屋といわれた「有本」の跡で、弁慶石町という）から出土しました一連のもので、非常に興味深く見たわけであります。

### 1. 信楽花生 h.22.6cm

これは信楽焼の花生だろうと思います。このような形式のものがいつごろ焼かれたかという事は、未だもうつはっきりいたしませんけれども、どうも弁慶石町から出土した陶片を見ておられますと天正年間末期頃から慶長年間のごく初期までの間に焼かれ、牛座されていたものではないかと思います。この痕跡についてこの前桂文センターの方におさきした限りにおきましては、もしかすると慶長元年(1596)の加藤清正で有名な桃山城の地震の時に崩壊した痕跡ではないかと言っておられました。私に意見を求められましたので私もどうも製品から見るとそれくらいに限定しているのではないかというふうなことを申し上げたわけであります。



1 信楽花生



2 備前水指



3 備前窑茶碗



4 瀬戸黒茶碗

### 2. 備前水指 h.15.1cm

弁慶石町出土の水指の中ではこれなんかなかなか姿のいい、すぐれたものだと思います。器表には、いわゆる胡麻釉と申します灰釉が口縁部とそれから胴にすっと垂れ流れて掛かっておりまして、やはり当時の備前焼一重口の水指の典型作だといえます。このような形のものは伝世品ではありませんが、今も申しましたように伝世の茶陶というものは永年に亘る一つの美的選択のあとに今日まで残っているわけでありますから、伝世品と同じものは少ないのでしょうか。

### 3. 備前窑茶碗 h.8.2cm d.12.3~13.8cm

これは腰の丸い半筒形式の茶碗であります。これと全くといっていいくらい同じような美濃で焼かれた黄色い釉のかがつた形の茶碗があります。ですからやはり時代的好みとして共通したものが美濃でも備前でも焼かれている。桃山の茶陶の特色がそこにあると言えますね。このことは消費地からの注文をダイレクトに受けて美濃だ、備前だ、信楽だというような所で生産していく、あくまでその造形に対しては消費地側が主導権をもって注文をしているというふうな中で各地に共通のものが生まれていったと考えていいのではないかと思っております。

### 4. 瀬戸黒茶碗 h.8.3~8.7 cm d.13.3cm

これは美濃で焼かれたいわゆる瀬戸集であります。おそらく天正年間中頃以後のものだらうと思います。これらが完成しますのは天正年間、ちょうど利休居士が佗びの茶を大成されました大正10年から19年ぐらいの間に茶碗としての形の整った瀬戸黒茶碗というものが焼かれたのであろうと考えられており、この手を昔から天正黒といったりしております。こんなものがみごとにいくつか出て来たという事はやはり過去にはなかったことで、消費地としての、また京都という所の桃山時代における文化の在り方、確かに窯で大変興味深く見たわけでございます。

### 5. 志野茶碗 h.8.8cm d.13.3cm

志野の茶碗ですね。志野の完形の茶碗。これほど完形の茶碗が出て来たというのはやはりこれまでの消費地においてはほとんど